

日本語コミュニケーション力を高める授業実践

— 日本人高校生と外国人日本語学習者の協働学習から —

坂口昌子
村山弘太郎

〈Summary〉

In this paper, we observed and analyzed the contact situation between Japanese high school students and international students. What do they learn through group work to speak and make a presentation in “easy Japanese” and talk about Japanese cultural things.

“Easy Japanese” is the new concept of Japanese communication. Of course English is the most global language, but there are many people who can't speak it. If Japanese native speaker use the “easy Japanese” for the people from other countries, intercommunication become simpler than English. And, we think that it can help polish even as for the communication between Japanese.

We describe about it based on questionnaire with the Japanese native high school students and four Japanese teachers and advisers.

As a result, we believe that this lesson had the effect of promoting communication awareness.

はじめに

京都外国語大学日本語学科では、高校教員の方々と一緒に、高校生のコミュニケーション力を高めるための日本語教育の方法を模索している。その研究の一環として、2017年7月に、滋賀の私立高校2年生の32名にワークショップ型授業を実施した。本論では、その授業内容に関する報告と、授業後のアンケートの結果について述べ、日本語母語話者が「外国人とやさしい日本語で話す」という体験をすることで、自分のコミュニケーションを見直すきっかけとなりうるということを述べる。

具体的には、「やさしい日本語」で外国人留学生に「日本語で日本文化的ことがらについて話す」という課題を90分を2コマで実施した。1コマ目は、高校生だけが参加し、講義内容をふまえた上で、自分たちが集めた情報を外国人向けにまとめるための時間とした。2コマ目は、高校生が外国人留学生と実際に接触して、話し方を考え、外国人留学生と共同で、最終成果としてのプレゼンテーションを作り上げ、皆の前で披露するという時間である。

日本語母語話者と外国人日本語学習者の接触場面における研究は、外国人日本語学習者の側面から考察されたものが多いが、それに加えて、接触場面における日本語母語話者の言語変容に関

しても、フォリナートークの研究という側面から議論されてきた。

さらに近年、「やさしい日本語」ということばがよく使われるようになってきた。野田(2014)や庵(2015)は、「やさしい日本語」を身につけることは、外国人側の努力ではなく、日本語母語話者の国語教育の問題であるとし、外国人に説明するという言語行動は、日本語母語話者にとって重要な意味を持つと述べている(庵2015;p.10)。本論でも、「やさしい日本語」を用いて、外国人日本語学習者とコミュニケーションをはかる力を身につけることや、身につけるところまでは達成できなくとも、「聞き手によって話し方を変える必要がある」ということを日本語母語話者が体験することで、コミュニケーション教育や国語教育としても有効であると考えられる。それは、一般的に言語教育において、コミュニケーション能力の要素として、次の4つが挙げられることと関わる。

①文法的能力 ②談話能力 ③社会言語能力 ④方略的言語能力(小池(2003;p.417))

通常日本語母語話者同士が話しているときには「ある程度その場の雰囲気伝わると」という経験をしているが、非母語話者と話すことによって、「伝わらない」という体験をする。その時にさまざまな言語調整を行うのであるが、それによって、上記のコミュニケーション能力の要素のうち、①の文法的能力に関しては、語彙の選択、単文で話すことなどによって鍛えられ、②の談話能力に関しては、わかりやすい文章の組み立てを念頭に置くことなどで鍛えられると考えられる。そして、特に③の社会言語能力と④方略的言語能力の向上がもっとも強くはかれると考えている。

また、この授業で、話す内容として文化的なことがらを選択した理由は、2つある。1つは、外国人日本語学習者の日本理解の促進及び知的好奇心の充足を図るということである。もう1つは、高校生という若い日本語母語話者にとっては、文化的なことは「経験しているが、体系的に説明することができないことがら」だからである。身の回りにあり、「知っているか、知らないか」と言えば「知っている」ことではある。しかし、説明しようとすれば、なかなかできない。つまり、日本語のみならず、自覚的に自文化についても学習を意識しなければ外国人にそれを伝えることができないという点についても、気づきを促進することができると考えたためである。

本論では、実施の概要を2. で、日本人高校生へのアンケート結果については3. で、指導者側からの意見については4. で述べていく。なお、アンケート結果を論文内に引用することについては、個人名を出さないという条件で各生徒から書面にて承諾を得ている。

1. 先行研究

本研究と関わりの深い分野としては、フォリナートーク研究、「やさしい日本語」研究などが、挙げられるだろう。

フォリナートーク研究としては、接触経験の多寡が言語運用に関わることを述べた筒井(2008)や柳田(2010)などがある。筒井(2008)は、外国人住人に自治会に入会してくれるよ

うに頼むロールプレイを、日本語教師、ホストファミリー経験者、一般母語話者に行い、結論として非母語話者との接触が少ない人は、辞書的な意味の説明を多く行うのに対し、接触が多い人は、例示などを用いて具体的に説明することを報告している。また、柳田（2010）は短編コメディの内容を相手に伝えるというタスクを用いて、母語話者の日本語について、外国人との接触経験が及ぼす影響を考察している。接触経験が多い母語話者は、次の発話修正を行っているという。

- (1) 情報の切れ目が明確な文単位の発話を多く用いる。
- (2) 理解チェックを用いて、非母語話者に躊躇なく理解確認をする。
- (3) 非母語話者からの不理解表明がなくても、自発的に発話修正を行う。(p. 21)

また、「やさしい日本語」という考え方は、定住外国人にわかりやすい言葉で災害情報を伝えることを目的に作られた（佐藤 2004）。その後、庵（2015）によると、「やさしい日本語」は、日本語母語話者と定住外国人との間に信頼関係を形成し、学び合うためのツール（「居場所作り」）として、またはろう児などの言語的マイノリティの高校進学までを支援するためのツールとして、さらには、「地域社会における共通言語」として地域社会の日本人住民と定住外国人が共存するために必要なものであると述べられている。

しかし、言語弱者の側だけにより効果が得られるだけではない。これらの言語調整を行う言語技術は、日本語非母語話者などの言語弱者とコミュニケーションするときのみならず、母語話者同士であっても、情報をやりとりする場面で応用できるスキルであると考えられる。それに関して、野田（2014）は、次のように述べている。「情報伝達の面からも日本語をわかりやすくすることは、非母語話者だけでなく母語話者にもわかりやすいものになる。それは、どんな人にとっても使いやすい「ユニバーサルデザイン」に基づく日本語コミュニケーションということになる」（野田 2014；p. 10）

とくに年齢差のある、子供や老人と話す場合や、持っている情報量が異なる場合、話し合いをして双方の考え方をすり合わせる必要がある場合などには、上記の柳田（2010）の（1）～（3）の言語調整がコミュニケーション的により働きを及ぼすと考えられるし、大学生の初年度教育でも、わかりやすい文章・談話の書き方、話し方などを教える時に利用可能ではないかと考えている。

しかし、一方で、森（2013）は、従来の小学校国語教育の中では「書き換え」「言い換え」という活動を通して、「やさしい日本語」という取り組みは十分行われていることを述べており、「やさしい日本語」を母語話者教育に利用することに関しては過度な期待を持たず、長期的な視点で取り組みが続くように見守る必要があると述べている。それは、実際に国語教育では「やさしい日本語」の概念が取り入れられており、すでに日本語母語話者は学校教育の中で学んでいるにもかかわらず、母語話者のコミュニケーションスキルとして身につけていないということを示していると思われる。コミュニケーションスキルは一朝一夕に身につくわけではなく、長期的に国語教育だけでなく、教育現場に取り入れ続ける努力をする必要があるということだろう。

本論でも森（2013）と同様、これらのコミュニケーションスキルは教育の現場において経験さ

せることにより、その存在や意義の意識化は可能であったとしても、習得の実現には至らないと考えている。習得には、さらなる継続的な演習方法の構築が必要であろう。たとえば民俗学的フィールドワークを行う際、その現場では様々な年齢層のインフォーマントから聞き書きを行いながら、調査者が必要とする情報を収集するのだが、そこでの言語調整は繰り返し行うフィールドワークという実践の場の中において培っていくものであり、教育現場において使用することができるような言語調整技術の理論化やマニュアル化は現状では困難である。

現実のフィールドワークの場面では、その場に集まっているコミュニティの誰に最初に声をかけるのか、初対面の相手にどのように第一印象を与えるべきなのか、相手の情報量をどのように把握・評価すべきなのか、など様々な条件を考慮する必要が求められている。つまり言語技術の習得のみではなく、周辺諸分野の成果を取り入れた複合的な視野に立った実践的教育を施す必要がある。

本論での試みは、理論的に「わかりやすく話す」ことを学ぶと同時に、「外国人と日本語で話す」ことによって、実践的な気づきを生むきっかけとして働くものであると考えている。

2. 授業概要

2.1 授業の内容と流れ

2017年7月26日に本学で実施された、「近江兄弟社高等学校サマースクール」という機会を利用した。大学の授業講時3時間目・4時間目を使って、近江兄弟社高校の2年生32名に対して、「日本文化を日本語で外国人に教える」というワークショップ型授業を坂口・村山が計画し、次に挙げる表1のような手順で実施した。

サポートには、本学卒業生であり、現在は本学大学院修士課程2年の福嶋氏、高校教諭経験者で現在本学聴講生の阪口氏の2名を配置した。また記録としては、ビデオ2台・ICレコーダー2台で記録を取りながら進めた。

授業としては、「やさしい日本語」の概説を実際のリライト例などを見せて15分程度行い、そののち、コンピューターリテラシーと文化に対する考え方の講義を20分程度行った。

文化的な課題は、「七夕・花見・家紋・妖怪」の4つを選んだ。「七夕」や「花見」は日本語母語話者にとっては、幼いころから体験しているものであり、「七夕」と書いて「たなばた」と読まなくてはならないことも知っている。しかし、なぜ笹に短冊や飾りを付けるのか、短冊には何を書くべきなのかということについては、教えられていないし、知ろうともしていなかったことがらである。「花見」も同様で、なぜ桜を見て飲食をするのか、桜でないといけなのか、というようなことは疑問を持ちにくいことがらであろう。

「家紋」に至っては、自分の家の家紋を知らない高校生も多かったし、「妖怪」もテレビアニメなどでよく目にしていて、代表的な「妖怪」の名前や姿は知っていても、西洋の「モンスター」との違いなどについて考えてみることはあまりなかったと考えられる。実際に調べ始めて

表1 授業の流れ

3 講時	〈概説〉趣旨説明・「やさしい日本語」について 〈講義〉コンピューターリテラシー・文化について 〈題目発表〉「七夕・妖怪・家紋・花見」の4つ 〈作業・まとめる1〉教えることをまとめる。(4人×8グループ編成) 〈作業・まとめる2〉グループを2つ組み合わせ、その中で情報をすり合わせる。 (8人×4グループ編成)
昼休み	
4 講時	〈グループ内発表〉日本語学習者(初中級・中級レベル)が各グループに2人ずつ加わり、グループ内で、日本語母語話者が、日本語で日本語学習者に説明を行う。 〈作業・まとめる3〉コミュニケーション上問題があったことを踏まえ、発表内容を改編する。 〈発表〉日本語学習者を交え、教壇に上がって、全体に講義を行う。 アンケート実施

から、さまざまな人間以外のものについて何者なのかということについても高校生たちは議論し、映画「ミニヨンズ」のキャラクターなどについても高校生たちは議論している姿を目の当たりにした。

これらの文化的なことがらを、1コマ目でグループになって、調べてまとめ、どのように留学生に伝えるかということを考えて。そして、2コマ目に実際にグループに配置された留学生2人に伝える作業をしたあとで、わかりやすく言語調整をしたプレゼンテーションを全員の前で行った。

グループ活動を、初めは4人編成にし、次に8人編成に変えたのは、初めは小規模な人数でしっかり話し合っただけだったことと、異なる意見が集まるときにこそ、調整を行う必要があるということを経験してほしかったからである。

2.2 日本人高校生について

日本人高校生は、近江兄弟社高等学校「国際コミュニケーションクラス」に所属する2年生、32名である。全員が同じクラスに所属しており、皆が顔を知っていることもあって、物おじせずに発言する様子が見られた。引率の先生の話では、ディスカッション形式の授業はよく行われているそうである。また、英語ネイティブの教員の授業も多く、さらにクラスには中国からの留学生が1人いることもあり、全員が外国人と日本語でコミュニケーションした経験を持っている。

ただ、所属しているのが英語を重視するクラスなので、「英語で話さないで日本語で話そう」という試みには、やや抵抗感を持つ生徒もいたようである。

2.3 外国人留学生について

外国人留学生は京都外国語大学留学生別科に留学中の学生で、滞日期間は2017年7月現在で、10か月～4か月間である。母語と、日本語のレベルは以下の表2のとおりである。「初中級」とは『みんなの日本語初級Ⅱ』を終えた段階で、「中級」とはその後半年経過したレベルである。初中級の学生たちは日本の歴史や習慣を日本語で聞く経験は少なく、中級の学生たちは「七夕」や「祇園祭」といった日本文化の授業を受ける機会があるときも、リライトされた日本語の読み物を教師の解説つきで読む程度の日本語力である。

この外国人留学生たちは、教員が指名したのではなく、「日本人高校生の日本語での会話パートナー」として募集した際に、自発的に申し出てくれた学生たちで、クラスでも積極的な留学生が多い。

表2 外国人留学生の属性

個人記号	母語	日本語レベル	滞日期間
A	ベトナム語	中級	10か月
B	ベトナム語	中級	10か月
C	ミャンマー語	中級	4か月
D	英語	中級	4か月
E	イタリア語	中級	4か月
F	英語	初中級	4か月
G	ベトナム語	初中級	4か月
H	中国語	初中級	4か月

3. 事後アンケート

事後アンケートでは、日本人高校生に、次のことを選択肢と自由記述で問うた。その結果についてまとめていく。

1. 授業内容への興味
2. 授業内容の難易
3. 授業で体験できたと感じたこと

3.1 授業に対する興味について

まず、外国人と日本語で話すことに関して興味を持ったかどうかを聞いたところ、図1のように「興味深い」「まあまあ興味を持った」と答えた日本人高校生は90%を超えていた。

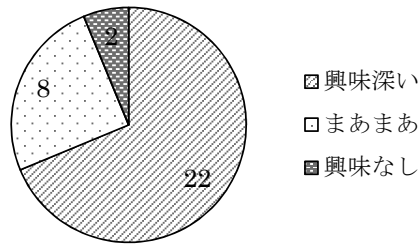


図1 「外国人と日本語で話す」ことへの興味

自由記述では、次のような意見が見られた。

- 1) 日本語でのコミュニケーションもおもしろい。(NS4)
- 2) (日本語が) できる人とできない人の差がおもしろい。また、それを教えるのもおもしろい。(NS3)
- 3) 日本と外国の差を考えるとおもしろかった。知らなかったことに気づかされた。(NS32)

3.2 授業の難易について

難易については、「難しい」「まあまあ難しい」と答えた日本人高校生が図2のようにこれも90%を超えている。

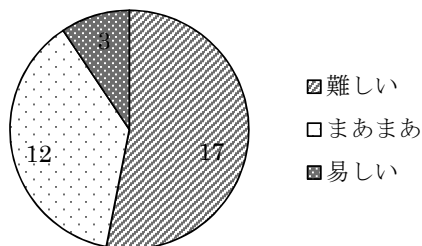


図2 「外国人と日本語で話す」ことは難しいか

これらの難しいと思った内容について、言語的な気づきと、文化的な気づきにわけて述べていく。また、言語的な気づきについては、コミュニケーション能力の4つの要素(①文法的能力 ②談話能力 ③社会言語能力 ④方略的能力)にわけて考えていきたい。

3.2.1 言語に関わる難しさについて

日本語の調節に関しての気づきも多く、次のような意見も見られた。これらは、「相手に合わせること」とまとめられるので、コミュニケーション能力の4つの要素のうち、③の社会言語能

力の部分だと考えられる。

- 4) どれぐらい日本語が理解できるのかを自分の力で考え抜く事がとても難しかった。(NS5)
- 5) 相手のことを考えることが難しかった。(NS14)
- 6) 簡単な日本語を考えないといけないから難しいと感じた。(NS9)
- 7) 私たちが日常で使っている日本語では通じないこともあるということを改めて知りました。(NS10)
- 8) 日本語を調節しなければいけないのがとても難しいと感じました。(NS20)

また、それと同時に、自分の日本語力に関しての気づきを書いた日本人高校生もいた。これらは上記の③社会言語能力に加え、語彙や文法に関わるものだと思われるので、コミュニケーション能力の4つの要素のうち、①の文法的能力にも関わる部分だと考えられる。

- 9) 英語は出てくるのに、日本語で日本語を伝えられない。(NS30)
- 10) ポキャブラリーを増やさないといけないと思いました。(NS15)
- 11) 日本人だけど、日本語で伝えるのは難しかった。(NS2)
- 12) 「家紋」など難しいことばを伝えるのが難しかった。(NS8)

3.2.2 文化的なことがらに関する難しさについて

また、言語的な気づきと同時に「言語の調節」と同時に「文化的な知識」について言及した意見も多かった。

- 13) 日本の文化について詳しく知っていないので、まず、日本人が日本文化について知る必要があると思った。(NS18)
- 14) 身近な日本の祭や行事などの意味をしっかりと考えたい。(NS19)
- 15) 身近な日本の文化を改めて調べることができた。(NS27)

さらに、自分の国のことだけを伝えるのではなく、双方向的な情報のやりとりがあったこともうかがわれた。

- 16) 自分の国のことを言ったのに、相手の国のことも知ることができた。(NS23)
- 17) (留学生が)「伝統的」ということばを知っていた。でも、天皇を知らなかったのは意外だった。(NS31)

3.3 授業で学べたことについて

最後に、「この授業で体験できたと思うものは何か」という質問に対して出てきた回答を図3で示す。上記の自由記述での回答と同様、「身近な日本文化を深く知ることができた」、「外国人の興味を考え、それに合わせる事ができた」、「外国人の日本語レベルを考慮することができた」という3つを選んだ生徒が多かった。

また、「わかりやすくまとめる」と「人前で話す」という項目は、コミュニケーション能力の4つの要素の②の談話能力に関わるものであるし、「聞き手の興味に合わせる」「外国との文化差を考慮する」「聞き手の日本語レベルを考慮する」「初対面の人と話す」「協働する」という項目は、③の社会言語能力に関わるものである。これら③の社会言語能力に関わる気づきが多かったということは、今回の授業が、高校生にコミュニケーション上の言語調整の必要性に気付かせたという意味で有効だったと言えるのではないだろうか。

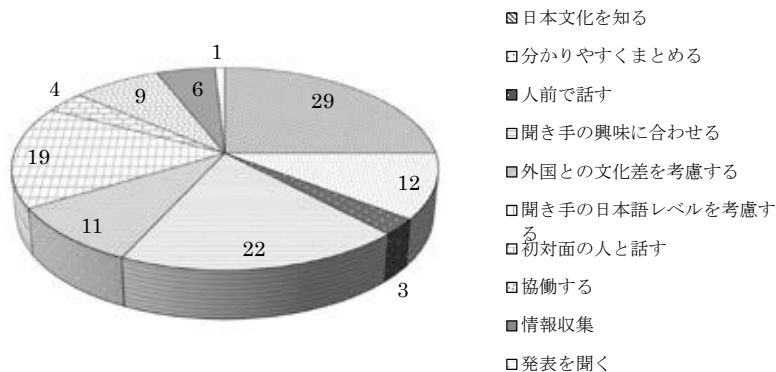


図3 当該授業で学べたこと（複数回答）

4. 指導者側の感想から

教員の感想と、サポーターの感想を以下に挙げる。Kという記号が付いているのが、見学していた教員の感想で、Sという記号が付いているのが、サポートの院生・卒業生の感想である。

高校生と留学生の話し合いについては高校生の中に積極的な生徒とそうでない生徒がいて、コミュニケーションをとれる人が限られていたという感想が4名に共通していた。また、話さない（話せない）留学生へ働きかける高校生が少なかったことも指摘されている。

18) 留学生と話しているときは、初めて会う人（もしくは留学生）と話すことに抵抗のない少数の人が話し続けている傾向があったように思います。(S1)

19) 国際系のコースに通っている高校生でも、留学生と積極的に話す生徒と、頷くだけの生

徒に分かれていたように思う。(S2)

- 20) 日本語力が低く、おとなしいタイプの留学生は、話し合いに加わるのではなく、自力で携帯電話を使って検索をしている様子も見られた。(K1)

また、日本語力の低い留学生へのめくばりが十分ではないことが次のように書かれていた。

- 21) 留学生が分かっているかどうかの判断を積極的に反応する留学生で感じていたようにも伺え、結果的に話がわからないままの留学生が出たのではないかと思います。(S1)
- 22) 最初に一方的に調べた内容を説明してから、質問タイムを取っている班があった。長くても1項目終わるごとに質問を留学生にしてあげると理解の定着度も違うと思うが気がつけた子はいなかった。(S2)

一見スムーズにコミュニケーションをはかっているように見えるが、実はそれから外れてしまう参加者もいることがわかる。

日本人高校生も外国人留学生も、メディアツールを使ってコミュニケーションをとるというスタイルは一般的だった。母語の辞書はもちろん、絵や写真を多用して、コミュニケーションをはかっている様子がそこには見られた。方略的言語能力が有効に利用されていると見るができるだろう。

- 23) 留学生との話し合いでは積極的に自分の携帯電話で写真などを写し、言葉だけに頼らないコミュニケーションをはかる様子が見られた。(K1)

ただ、使いこなしているかどうかに関しては、次のような意見もあり、まだまだ情報検索力としては、足りていないと感じた教員もいた。

- 24) スマートフォンで検索する際に、検索ワードの乏しさが見られた。つまり日常的に検索エンジンを使用していながら使いこなしていないと考えられる。(K2)

プレゼンテーションについても、形式は整っているものの、留学生への配慮や、日本語の調整が不十分であると考えていることでは4人が一致した。

とくに、次の25)の回答は、プレゼンテーションの完成度について、①文法的能力、②談話能力、④方略的言語能力に関しては、ある程度満たされていると述べているのに対し、③社会言語能力の不足を示していると考えられる。

- 25) プレゼンテーションについては、高校で学んでいるのであろう成果が表れていることを感じた。まず先に何について話すかを話したり、積極的に絵や写真などのスライドを使ったり、文字を使ったりしており、プレゼンテーションとしては上手だと感じた。しかし、わかりやすい日本語を使うということに関しては、ふりがなをふるなどの他は、ほとんど考慮できていないのではないかという感想を持った。(K1)
- 26) 花見の班だけが、自分の班の留学生以外のことも考えてかPPT内の漢字にルビをふっていたので、よく気がついているなど感じた。(S2)
- 27) 発表内容を書いた紙をどうしてもずっと見てしまう為、目線が下に下がっている生徒が多かった。目線が上がってくれば、表情などで伝わり方ももう少し変わったかもしれない。(S2)
- 28) 自分たちで調べていた際、また留学生と話していた際には説明されており内容としては重要な部分が発表時に抜け落ちてしまったことが一つです。また分かりやすい日本語を使おうという部分がありなかった(生徒たちの「英語で喋ったらええのに」のような発言からも日本語に対し、あの授業ではそこまで重要性を感じられなかったとも取れる)というように感じたのが記憶に残っています。(S1)

5. まとめ

アンケート結果や、授業中の交流の様子から、外国人留学生と話し合いながら「外国人にもわかるように日本文化を説明する」という活動は、コミュニケーション能力の中の要素について、次のような気付きを得る効果があるといえる。

- ①文法的能力 母語話者自身の日本語の語彙力の不足に気付く。
- ②談話能力 わかりやすい文章・談話の組み立てに気を付ける。
- ③社会言語能力 相手の日本語に合わせた言語調整をする。初対面の人との会話を成功させる。会話についてこられない人に気配りをする。
- ④方略的言語能力 絵や文字、ルビなど、音声言語だけに頼らないコミュニケーションを活用する。

しかし、達成できたかどうかという点においては、まだまだ不足していると感じる指導者が多くいた。それは、日本人高校生が実際に留学生たちと話し合っ理解し合った日本語の話し方と、最後のプレゼンテーションでの話し方には乖離があり、プレゼンテーションで十分に言語調整などの成果を発揮できなかったということがもっとも大きな要因である。

今後、今回録音した音声を使って、留学生とグループ内でディスカッションしているときの話し方と、全員の前でプレゼンテーションをしているときの話し方の違いについて分析していきたいと考えている。

また、今回の調査では、外国人留学生にプレゼンテーションへの評価をしてもらったが、身近

で一緒に作ったという思いがあるからなのか、評価に大きな違いは出なかった。これに代わる日本人高校生の言語調整に対する効果的なフィードバックを新たに考える必要がある。また、今回の調査では、参加した外国人留学生への調査はできていない。効果的な双方向でのコミュニケーション力の育成を目指していくためにも、事後のフォローアップインタビューや、理解内容などを学習者の母語で問うなどの調査が今後必要だろう。

参考文献

- 庵功雄 (2015) 「『やさしい日本語』研究が日本語母語話者にとって持つ意義——『やさしい日本語』は外国人のためだけのものではない——」『一橋大学国際教育センター紀要』6 pp. 3-15
- 小池生雄編 (2003) 『応用言語学事典』研究社
- 佐藤和之 (2004) 「災害時の言語表現を考える」『日本語学』23-8, pp. 34-45
- 嶋原耕一 (2017) 「日本語教育パラダイムから見た接触場面における日本語母語話者の言語運用に関する研究動向」『言語・地域文化研究』東京外国語大学大学院 総合国際学研究科 no. 23, pp. 317-328
- 筒井千絵 (2008) 「フォリナー・トークの実際：非母語話者との接触度による言語調整ストラテジーの相違」『一橋大学留学生センター紀要』11, pp. 79-95
- 野田尚史 (2014) 「『やさしい日本語』から『ユニバーサルな日本語コミュニケーション』へ——母語話者が日本語を使うときの問題として——」『日本語教育』158, pp. 4-18
- 朴恵美 (2015) 「日本語学習者グループと母語話者参加グループにおけるピア・レスポンス活動の相違——「役割としての支援」という観点から」『一橋日本語教育研究』3号, pp. 37-48
- 日野純子 (2014) 「留学生と日本人の合同クラスにおけるグループディスカッション内の観察——やさしい日本語の観点からの考察——」『日本語教育方法研究会誌』vol. 21. No. 2, pp. 22-23
- 森篤嗣 (2013) 「国語教育と『やさしい日本語』」庵・イ・森編 (2013) 『『やさしい日本語』は何を目指すか』, pp. 239-257
- 柳田直美 (2010) 「非母語話者との接触場面において母語話者の情報やり方略に接触経験が及ぼす影響」『日本語教育』145号, pp. 13-24

謝辞

研究授業に参加して下さった、近江兄弟社高校の生徒さんたち、引率教員の先生、京都外国語大学の留学生別科の留学生のみなさんに心から感謝いたします。また、授業のサポート役、記録係をしながら貴重な事後感想を述べて下さった福島剛司氏、阪口栞氏にも心から感謝申し上げます。

さらに、投稿に当たり、貴重なコメントをしてくださった査読委員の先生にもお礼申し上げます。

本研究は日本学術振興会による挑戦的萌芽研究「高大連携におけるコミュニケーション教育の研究」(平成27年～29年度, 研究代表者: 坂口昌子, 課題番号: 15K12902) の助成を受けた研究成果の一部です。